軽種馬生産技術総合研修センター

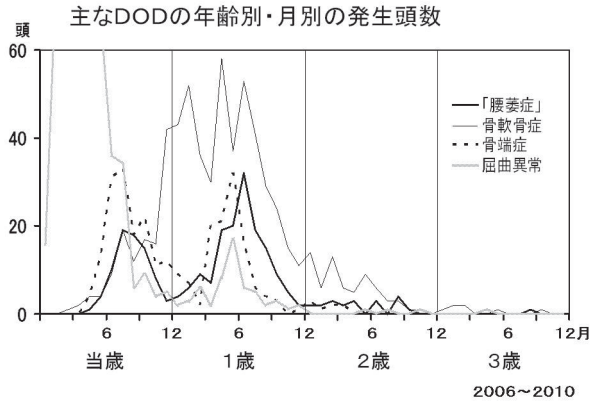
マンスリーレポート 25

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

健康管理と獣医療技術
―DOD発生状況調査「飼養管理」―

日高管内の獣医師の診療カルテをもとに、ＤＯＤの発生状況について調査した結果を、「ＤＯＤ発生状況調査」と題して、これまで７回にわたって報告してきました。

図－１



牧場ごとのＤＯＤの発生状況は、その牧場の飼養方法等の是非を反映していることがあります。ＤＯＤのなかでも、当歳時の球節の骨端症の多い牧場、１歳春の腱拘縮（突球）の多い牧場、毎年のように「腰萎症」を発症する牧場など、それぞれ特徴があります。ＤＯＤの発生が他に比べて多い牧場、あるタイプのＤＯＤだけが多発する牧場は、発症した１頭ごとを問題にするだけでなく、餌の量と質、放牧の場所や時間など、飼養方法について、どこが他の牧場と違うのだろう、何がいけないのだろうと悩むことでしょう。

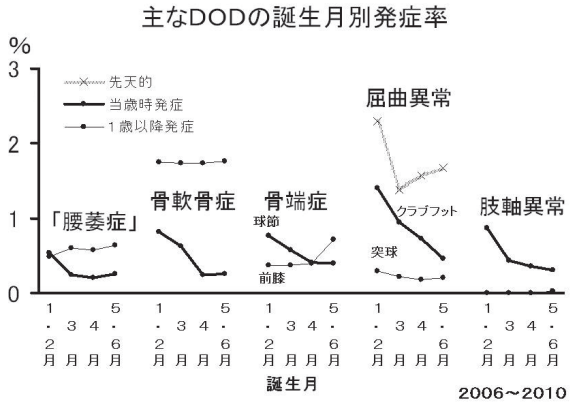
生産界全体のＤＯＤの発生状況を知ってもらうことで、ＤＯＤの発生を減らすことができるような改善策のヒントが見つかればと願って紹介してきました。ただし、これまでに紹介してきた情報だけでは、核心を突いたようなヒントは得られなかったことでしょう。

ここで紹介したことは、獣医師の診療カルテに書かれた、発症した馬の病名、性別、生年月日、発症月日といったものを集計しただけのものです。その馬がどのような餌を食べているのか、どのように放牧されているのか、その馬は太った馬なのか、背の高い馬なのか、そのようなことは診療カルテにはあまり書かれていませんし、分析も出来ていません。

それらをよく分かっているのは、毎日馬を見ている牧場の方々だけなのです。しかも、その牧場の方々にしても、骨端症やクラブフット等は気付いていても、獣医師に診療を求めない場合も多くあるでしょう。肢軸や関節屈曲の異常も、かなり重症でないと獣医師を呼ばない牧場もあるでしょう。たとえ獣医師を呼ぶほど四肢が腫れたり、跛行を呈したりしても、獣医師に鎮痛剤、消炎剤の投与だけを求めて、レントゲン撮影などもしないため、骨軟骨症など特定した病名もつかないままの症例もあることでしょう。ＤＯＤの発生状況が飼養管理技術のバロメータといえますが、それを最も敏感にチェックできるのは牧場の方々なのです。

ＤＯＤ発生状況の紹介の最後に「出産を早くさせたいなら、ＤＯＤ発症のリスクを考慮しろ。」というデータを紹介します。どのタイプのＤＯＤも、早生まれの馬の方が、発症率が高いようです。特に当歳で発症する「クラブフット」は、その傾向が著名です。

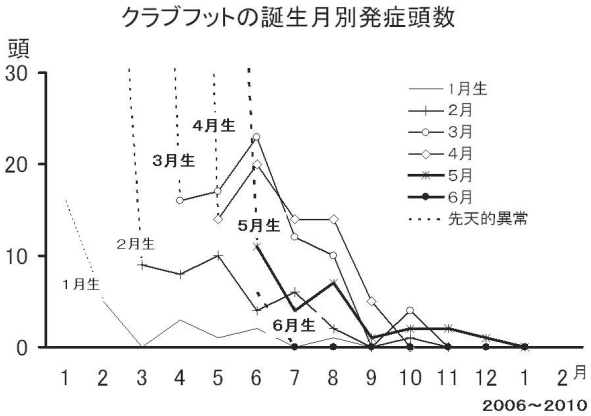
図－２



発症率は、日高管内の月別全誕生頭数（2007年）を母数として計算した。

「リスクは分かるが、売れるような大きな馬をつくるには仕方ない。」そして「母馬の管理（餌、運動）に気を付けている。」「放牧地の凍結、硬化をなんとかする。」など、牧場によっていろいろ考えはあるでしょうが、最終的に決断するのは牧場の方々自身なのです。いい成果が得られた時に一番喜べるのも、牧場の方々なのですから。

図－３



1、2、3月生れは、3ヵ月齢をピークとして発症しているが、4月、5月生れは、それぞれ2ヵ月齢、1ヵ月齢を発症のピークとしてその後減少し、6月生れはほとんど発症しない。